



ハイトナイト祈禱課題 2026年11月号

1. イスラエルの慰めと回復を覚えて

2023年10月7日の恐ろしいテロから3年がたちました。イスラエルの約1200人が殺され、251人が人質としてガザに連れ去られました。約6千人のテロリストがイスラエル領内になだれ込み、男性も女性も、赤ん坊から年配者、妊婦も、実に残酷な方法で殺害していきました。家ごと焼かれ、遺体が原形をとどめない状態で見つかった人々も多くいました。

一つの場所で最も多くの死傷者を出したノヴァ音楽祭では、逃げ惑う人々を、テロリストたちがユダヤ人狩りをするように殺していきました。あの日、イスラエル中の人々が、悪夢を通りました。恐ろしいテロの現場を生き延びた人、ガザで人質となっていた人、愛する人を殺された人。時間がいくら経とうと、それぞれの人生から10月7日はなくなりません。その心に植えられた恐怖やトラウマは、癒やしがたいものです。

ノヴァ音楽祭から生還した女性は言います。「世界はみんな前に進んでいるのに、私はあの日からずっと、取り残されたままです」。ヤルデン・ビバスさんは、ガザで約1年4カ月にわたり拘束されました。あの日、妻のシリさんと4歳のアリエル君、生後9カ月のクフィル君も拉致されました。ヤルデンさんは、解放後、愛する妻と幼い息子たちの死を知りました。ヤルデンさんはこう語ります。「How are you と聞かれるのがつらい。『元気だよ』とうそをつくか、つくり笑顔をするしかないから。毎日地獄にいるようです。ガザで捕らえられていた時より、今の方がずっとつらい。ガザにいた時は、妻と子どもたちがまだ生きているという希望を捨てなかった。生き続ける目的があった。でも、今は守るべき妻と子どもたちがいない。守りたくても守れない。私と妻は一つでした。今一番耐え難いのは、最も恐

ろしいこの現実には妻なしで向き合わなければならないことです。肩に手を置いて、『大丈夫』と思わせてくれる妻はもういない」。それでも、ヤルデンさんは言います。「妻と子どもたちを覚え続けるために、私はどんな人生であっても生き続ける」

多くの人質が先に解放される中、ガザで2年間、最後まで捕らわれていたガイ・ギルボアさんは、極度の飢えや暴力、性的暴力に耐えていました。体は解放されても、心はトラウマに苦しみ続けています。しかし、ガイさんは今、勇気をもって証言しています。「私には世界に伝える責務があると思う。声を上げ、他の性暴力被害者を励ましたい。彼らは孤独ではないと」

それぞれが癒やしがたい傷を抱えながら、懸命に生きています。あるユダヤ人は言います。「私たちの心は深く傷ついている。でも、私たちは打ち砕かれてはいない」。イスラエルを打ち砕こうとする力がいかに激しくとも、イスラエルは生き続けます。人の目にはどんなに絶望的に見える状況であっても、神は慰めと回復を与えることがおできになります。そして、神はそうなさると約束されました。私たちも、イスラエルの痛み悲しみを覚え続け、神の約束を握って、慰めと回復を祈り続けましょう。



元人質のガイ・ギルボア・グラールさん
体は解放されても、心はトラウマに苦しみ続けている Photo: B.F.P. Japan

「慰めよ、慰めよ、わたしの民を。——あなたがたの神は仰せられる——」(イザヤ40:1)

- ①主がトラウマに苦しむ人々の心を完全に癒やし、解放してくださるように。
- ②主が愛する人を失った人々を慰め、生きる希望を与えてくださるように。
- ③闇が打ち砕こうとしたイスラエルの人々の人生を、主が喜びと光で満たしてくださるように。

2. 日本の回復のために

今、日本はさまざまな分野で深刻な課題に直面しています。

経済面では、バブル経済崩壊以降、約30年にわたり成長が停滞し、平均給与も伸び悩んできま

した。かつて世界第2位を誇った名目GDP（国内総生産）は、2023年には第4位に後退。さらに、人手不足と物価高も重なり、今年上半期の企業倒産は5335件と、4年連続で前年同期を上回りました。

こうした中、若者たちの間にも将来への不安が広がっています。日本財団が今年、6カ国の17～19歳を対象に行った調査では、自国の将来が「良くなる」と答えた日本の若者は、わずか15.6%。6カ国中、最も低い割合でした。

人口減少と少子高齢化も進み、地方では過疎化が深刻です。学校や医療、交通など、暮らしを支える仕組みの維持が難しくなっている地域も増えています。

自然災害も相次ぎました。今年は熊本地震や各

地の豪雨で尊い命が失われ、甚大な被害が出ました。今なお、多くの被災地が復興の途上にあります。

国防面では、近隣諸国である中国、ロシア、北朝鮮が極超音速兵器の開発を進め、台湾有事への警戒も強まっています。

現代は、技術の進歩や価値観の多様化によって、社会が急速に変化している時代です。日本社会にも新たな混乱やひずみが生じています。私たちクリスチャンには、その社会の「破れ口」に立つてとりなす使命が与えられています。私たちの希望は、真の神にあります。主は日本に、深い恵みと情熱を注いでおられます。良い計画をもって回復へと導いてくださると信じて、祈ってまいりましょう。

わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている——主のことば——。
それはわざわざではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。
（エレミヤ29:11）

- ①日本が抱えるあらゆる課題に主の解決が与えられ、主のご栄光が現されるように。
- ②日本を導く政治家や行政の担当者に、適切な判断力と知恵が与えられるように。
- ③将来に不安を抱く人々が、真の神に希望を置き、救いと平安をいただくことができるように。

3. 北陸のためのとりなしの祈り

北陸の慰めと回復のために

2024年の能登半島地震から間もなく3年。復興途上で豪雨災害にも見舞われ、多くの方々が深い痛みと苦しみを経験してこられました。また、イスラエルも2023年10月7日のテロから3年が経過しました。イスラエルの慰めを祈る中、「私たちの国も傷つき、痛んでいます」と主に訴えたとき、返ってきたのは「慰めよ。慰めよ」という御声でした。誰よりも深く悲しんでおられるのは神さまご自身です。

主は悲しみを共にし、とりなす私たちをも慰め、他者を慰め祝福する力を注いでくださいます。

- ①主が、被災された地域、人々の生活を一日も早く再建してくださり、真の回復と平安を与えてくださるように。
- ②被災地で支援活動をされる教会や団体に主からの慰めと一致が与えられるように。
- ③主が北陸を慰めで覆ってくださり、主の慰めと祝福を日本中に押し流す器として強めてくださるように。

北陸が祝福の源として ますます用いられるように

北陸は「真宗王国」と呼ばれ、浄土真宗の信仰文化が根付き、福音宣教が難しい地域と言われています。しかし戦国時代、金沢ではキリシタン大名・高山右近を通して多くの武士が信仰に導かれ、約千人が受洗したと言われています。明治初期には、長崎・浦上から流罪となった526人のキリシタンが卯辰山に幽閉されましたが、彼らの信仰に触れた牢獄の監督が救われ、後に牧師となりました。

北陸は、不屈の信仰と祈りが流れている地です。

- ①北陸にこれまでまかれてきた福音の種を主が芽吹かせてくださり、多くのたましいが真の神である主に立ち返るように。救いへと導かれるように。
- ②北陸が真の神の王国として、日本全国の祝福の源となるように。